

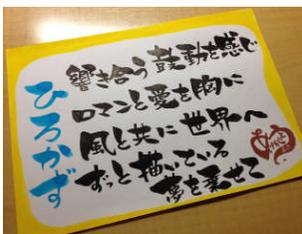
## 編集室から

小さい頃から父親の転勤に伴い、よく転校したからか、今でも新しい輪に混じっては、おかげさまで友人がどんどん増えています。

そんな中のお一人、愛称「まのっち」さんと千藤麻乃さん。長じたお子様がいらっしゃるとはとても思えない素敵な方なのですが、実はとても素晴らしい特技を持っておられます。それはまのっちさんの「なまえうた」としても知られているのですが、一人ひとりの名前から連想される言葉を、素敵な筆文字にしてつづってくださいというものです。

他の方の「なまえうた」にスッカリ魅了されて直ぐに僕のもお願い致しました。(写真)

僕のことはほとんど自己紹介差し上げていないにも関わらず、こんな素敵な「うた」にして頂きました。何度読み返しても、何で僕のことこんなに判るんだろうと不思議な気持ちになります。



小学6年のときに将来の職業を決め、それが30歳を過ぎた頃、十分に叶い始めた時分から、自分は本当は何がしたいのだろう...と随分、自らの心の奥底を探したものです。

最近、全国各地の同志・仲間と、語り合い、大きな共感・感動に包まれる時間を何より願っていることに気づきました。それはたとえ瞬間であっても、そこに至る経緯にはそれぞれ汗と涙の物語があります。

問題の無い人など世の中には居ません。ですが、その問題にどう挑んだのか。そこにこそ、多くの人を惹きつける魅力が潜んでいます。

問題がある事を恥じるのではなく、問題を避ける生き方をすることを恥じる。そんな生き方をしたいものです。(は)



Chintara

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川島さんが「能登の夜市」の姉妹店を開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

もちろん、川島さんご自身もお店に立っておられます。

日本酒バルChintara

03-6427-8183

17:00~24:00

金曜17:00~28:00日曜祝休

渋谷区道玄坂2-19-3ライオンズマンション道玄坂1階

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2014/07

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)

## 文 月



若狭にて  
by hama

2014/07  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>

## 寄稿 『あまこと』

株式会社 天琴 代表取締役 五井 隆浩

株式会社天琴（あまこと）の五井と申します。最近、会社名に横文字の言葉を使う会社が多いのですが、あえて和を意識しました。

弊社は、総合コンサルティングと、商社として物品の卸販をメインの業務にしています。行政機関の防災計画や福祉計画等の計画策定の支援や、事業者の事業計画策定の支援マネジメント支援等も行いますが、根底にある強い思いは、地域活性化と持続可能な社会づくりです。

私が主体的にまちづくりに参加したのは、社会人を経験後、地元の大学院大学に進学したときです。大学院が立地する地元自治体から「住民参加のまちづくりをコーディネートしてほしい」との要請を受け、3年間ほどプロデューサー兼コーディネーターとして、まちづくりを企画立案・運営しました。

現在は社会企業家を意識して事業を進めており、今のトレンドは、農業における持続可能性を意識したビジネスモデルの構築と展開です。農業を活用するビジネスモデルにサービスという視点を取り入れ、サービス・イノベーションを実現するビジネスモデルの構築を進めています。

大学院時代のまちづくりで出来た人間関係から

## 濱のつばき 『みちゆき』

シンクタンクノ街づくりコンサルタントノ地域づくり  
コーディネートノワークショップ・ファシリテーションノ  
人財研修講師：

名刺交換や自己紹介を差し上げる際、お仕事は？と訊かれて即座にどれを答えるかは、その場や先方の業界・専門性に拠る。

この他に行政機関などの業務システムを始めとするICTシステムの企画・開発や、個人のメンタルな障害を外すセッションにも携わっているから、我ながら一体幾つの顔を持っているのだろうか…

これらを分かり易い一つの言葉で表現できないものかと名刺を作成するときから思案を重ねている。

そんな中、最近御知り合いになった方から一つの示唆を頂いた。

日本には八百万と言われるとおり、様々な神々がおおす。そしてそれぞれに異なる神格、つまり特長・性格がある。それがまさに人間模様のように親和性の高い神話を織り成している。

そしてこれらの神格とは、その神が得意な事でもあるという。例えば昨年六十年ぶりの遷宮となった出雲大社に祀られている大国主命は、国を平定する過程で各地の女神と婚姻し、多くの子（神々）を設けたことから、今日では縁結びの神として崇められているといった具合だ。

件の方からは、猿田彦命を調べてはどうかと勧められた。猿田彦命は、天孫降臨の際、天津神々に葦原のこの国を案内した神。道案内の神とされている。学生の頃熟読した手塚治の大河漫画「火の鳥」に幾度となく登場する天狗

は、NPO法人心田開発という団体を立ち上げ、現在副理事長として活動しています。ここは、農業をキーワードとして、心に風邪を引いた鬱や躁鬱になってしまった人たちに、園芸療法を提供し、症状を維持改善する環境を提供している団体です。土に触れ、植物の育成に携わっていくなかで人間性を取り戻していくことを目標としています。

こうした事業自体、人との関わりが基本で、業務遂行のためにはコミュニケーションが重要な要素です。その中で心がけていることが二つあります。

一つは、「人を好きになり、積極的にコミュニケーションすること」です。これが出来るようになって、逆に人から関係を持って頂けるようになりました。

もう一つは、「感謝すること」です。良い出来事はもちろん、悪い出来事が発生したときも、感謝をするようになりました。

感謝は、自分が実施することですが、間接的なコミュニケーションを促進しているようです。

今回、弊社を紹介する機会を与えてくださり、本当にありがとうございました。



【プロフィール】  
（こい たかひろ）北陸先端科学  
大学院大学を経て現職。地元石  
川の他、長野にも事務所を構  
え、農と脳をつなぐ実践的な生  
き方から社会を変える試みをし  
ている。

のように鼻の大きい異形の神である。

道案内人。古くは、先達と言った。物理的な道の案内に留まらず、人生の道を指し示すという意味も含まれている。

そうか！一気に視界が啓けた。

次代の方向性を指し示すシンクタンク。具体的な方策を指し示すコンサルタント。人々の活動を支援し、より充実した成果をナビゲートするコーディネーター・ファシリテーター。新しいスキル・考え方を伝え、その後の歩みの指針や自信を強めていただく人財研修。

旅行の企画をして参加者を楽しんでいただくのも好きだし、研修ツアーでは道中、視察先の解説を良くしていた。

これらはいずれも「広義の道」の案内人としての役割だった。そういえば、漢字表記の社名の説明にもそんな主旨の事を現している。灯台下暗し。

芯と軸が、心に通った気がした。

早速、猿田彦命を祀る三重の椿神社に参詣せねばならぬ。ご報告と感謝をお伝えしに。

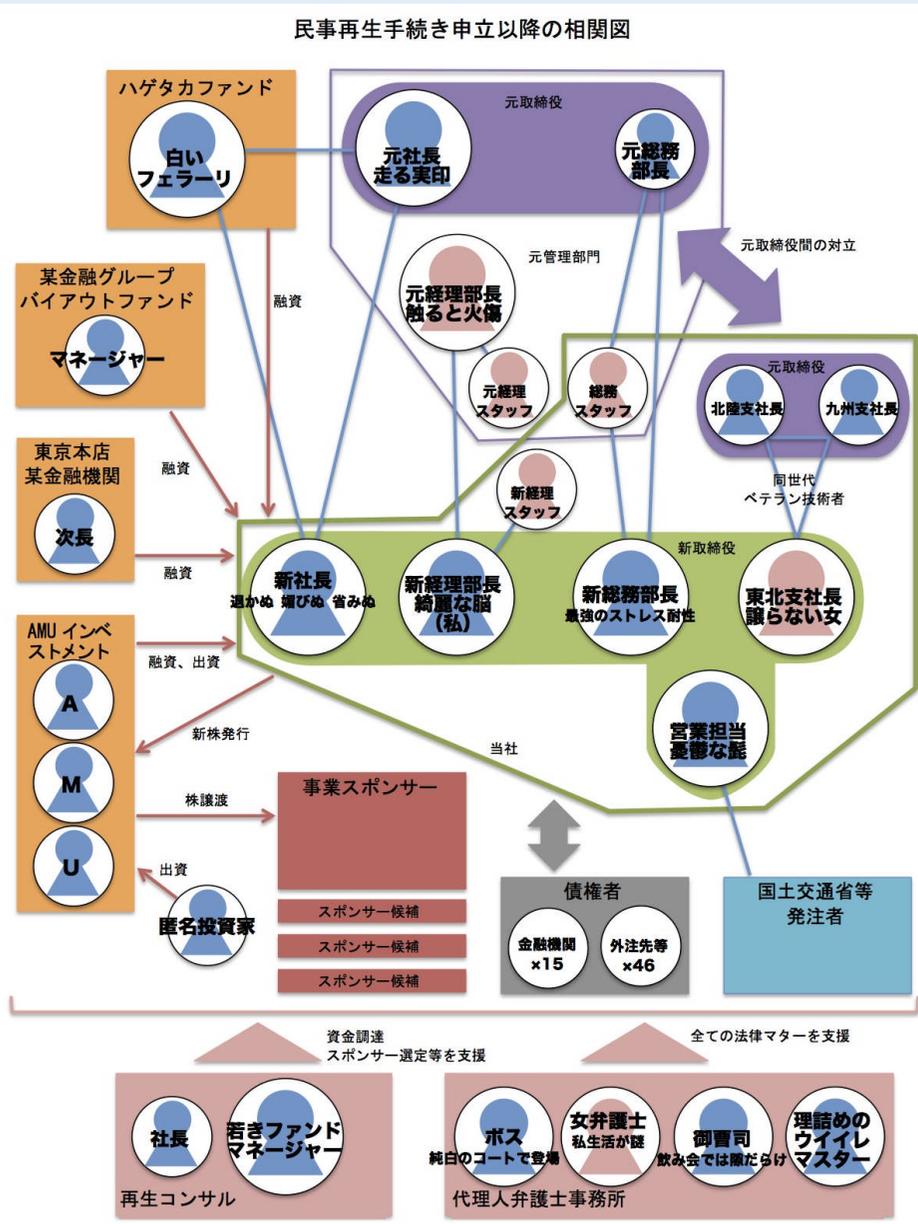
ところで余談。

地図で、伊勢の内宮・外宮と椿神社を結ぶ線をそのまま北西に伸ばすと、滋賀の多賀大社・彦根の千代神社を経て、敦賀の気比神社が一直線上に並び、気比神社には猿田彦も祀られ、千代神社・椿神社にはその妻である天宇受売命が祀られている。

何故、これらのお宮が直線上に並びのか…。しかも海岸線湖岸線も対称形。摩訶不思議なこともあるものだと思ふ。



主な登場人物の相関は下図のとおり。次号は「若きファンドマネージャー」について書かねばなるまい。



本原稿を書いている今、サッカー日本代表がコロンビア代表に1-4で惨敗しました。今大会は一分二敗とGL敗退という結果となりました。四年間をかけてこのW杯という舞台に向けて準備をしてきたということ、その結果日本代表史上最強チームと言われるまでになって迎えた本大会であった事を考えると、サポーターはもちろんですが、何より選手達の喪失感に相当なものでしょう。

さて今回のW杯を見ていると過去の大会に比べ2つの大きな傾向と大きな方向性が見えてきたことに気がきます。

1.アフリカの進化とアジアの後退

過去の大会までアフリカ勢と言えは「身体能力はずば抜けて高いが、組織としてのまとまりがなく、そこにつけこむ隙がある」という前評判が付きものでした。

今回もカメルーンのように試合中に仲間とトラブルを起こす未熟なチームもありましたがナイジェリア、アルジェリア、ガーナ、そして予選敗退はしたがコートジボワールと非常に統率された組織のなかで持ち前の身体能力を生かしたサッカーをしています。

欧州出身の指導者のもと、時間をかけてチームスポーツであることと勝者のメンタリティーを植えつけられた成果だと考えます。

それに反して、日本をはじめとしたアジア勢はこれまで一勝もできていません。前大会は16強に日本と韓国が駒を進めたことからアジアサッカーは後退している(もしくは進化が停滞している)と見ていいのではと考えます。欧州主要リーグに多くの人材を輩出しているにも関わらず何故弱体化したのか?

それはアフリカ勢とは逆の要因と考えられ、個の力の強化という視点を重視するあまり、元来強みであった組織的連動性を軽視してきたのではないのでしょうか? このことから、今後の世界サッカーにおいて日本は非常に厳しい状況が続くのではないかと思います。

個々が超人のような力を持つ国が組織力も持ち始めたのですから。

2.バスサッカーの凋落

バルセロナ、スペインに代表され、今回の日本サッカーのコンセプトであった「バスサッカー」が時代の終焉を迎えた感があります。

一見バスサッカーは“攻撃は最大の防御”のようなアグレッシブさを感じますが実は『ボールの保持率を上げることで相手に攻撃の機会を与えない』という非常に防御的な側面を持ち合わせます。

なので日本代表が標榜していた攻撃的バスサッカーとは実は守備的戦略だったのではないのでしょうか?

現在このバスサッカーを駆逐したスタイルは「カウンターサッカー」です。

守るべき時は相手にボールを持たせて守備ラインをあげさせ、全員で組織的守備でボールを奪取したのち、2手から3手で相手ゴール前にボールを運び、二列目三列目のスピード感ある上がりとともにゴールを奪うスペクタクル感のあるスタイルです。

今回最も強いであろうオランダ代表のサッカーがまさにこれです。

これらの傾向から、今後のサッカーは高いフィジカルスキルを前提とした、組織的なカウンターサッカーが中心になると思われます。

草サッカーをこよなく愛するおじさんとしては、フィジカルと組織力が融合する時代において、我が日本サッカーががどのような方向性を選択するのか楽しみでなりません。

## 『富士の国から ~大魔神のたび~ 』

ななつ星の旅(その8) 静岡県小山町経済建設部専門監 溝口 久

列車に戻るとダイニングカー「木星」に昼食が用意されていた。浜木綿御膳「日向灘仲秋の献立」とお品書きには書かれ、下にはななつ星のマークが。旅の間は全てななつ星オリジナルメニューが用意され自信にあふれた地産地消の料理が並ぶ。小鉢は柿なます、前菜には自家製からすみ、椀からは伊勢海老の髭がはみ出ている麦味噌仕立ての汁、浜松人が時に珍重する「戻り鰹」には品のいい薄緑の本わさびが添えられている。重の中に伊勢海老の蒸し焼きタルタルソース添えの脇には地野菜サラダが添えられ。お重という枠の中に美しく収められた料理を口にするのが惜しい気がしたが、箸はおっとりとしながらも丹精が込められた料理を次々と口に中に運んだ。ありがたさと幸せが口の中を満たし続けて行ってくれた。締めは新米のおにぎり、中にちりめん山椒が収められ、それを月桃葉で包むという、工芸品のようなおにぎりが用意されていた。デザートは栗の渋皮煮だった。

昼食中に都城を出たななつ星が向かった先は隼人駅だった。14:18着、降りるとななつ星バージョンのバスが先回りして駅前にいた。ここでも隼人市民の熱烈歓迎を受けた。

バスに乗り込んだ我々は鹿児島神宮に向かった。道中の街路灯にはななつ星のフラッグが並び、駅前花壇の縁石にもトレードマークの星が描かれ歓迎ムードが町中に溢れていた。

駅前商店会で乗客は買い物することも、おもてなしも受けることはできない。そこで出迎えに来た方々に「焼酎」「ぜんざい」「みかん」「お茶」が振る舞われていた。なにしろ駅には2000人もの人が集まり、こんなに活気づいた駅前を見たことがないとは地元の方の声だった。恐るべし、ななつ星の吸引力。

神宮に着くとまずは国分中央高等学校の生徒さんが「霧島茶」の振る舞いをしてくれた。

市長も直々のお迎えだ。ななつ星を描いたでんでん太鼓他お土産の品々も用意されていた。ファーストゲストならではのおもてなしを次々に受けた。

「おじゃんせ！霧島」と、華やかに着飾った鈴掛馬と約20人の踊り手による馬踊りがあった。本来は初午の時に、家畜の安全・多産を祈り、豊作や家庭の病気や厄を払うお祭りである。約450年の歴史を持ち、国の無形民俗文化財にされている。

多くの鈴が連なった胸飾り、花や錦などで飾った鞍を付けた馬を鐘、太鼓、三味線などの音楽に合わせて足踏みさせ、馬が踊っているように見せている。

鹿児島神宮を後にした我々が向かうは霧島市の旅館3軒(天空の森、雅叙苑、妙見石原荘)である。3泊4日の旅行行程の中で、2泊が列車内、1泊が旅館である。

1泊ひとり15万円の天空の森はデラックススイートルー



ムのお客に用意され、他のお客は石原荘か雅叙苑いずれかの選択となっている。

今から17年前、由布院観光総合事務所で務めているときに旅館組合役員から「視察先を雅叙苑」にとのリクエストがあった。聞くところによるとニワトリが敷地の中を我が物顔に歩いているというのだ。なんじゃそれは?と思いつつ年月が経ち、黒川温泉の「新明館」でニワトリを見ることができた。本家本元を見たいと思いつつ、今回この雅叙苑に泊まる機会に恵まれた。また、ANAの機内誌はじめメディアに紹介されていた、山いだきの露天風呂に白い日よけパラソル、目の前に広がるのは空と緑、「天空の森」名に相応しい超露天風呂の実物によく会うことができる。気分はいやが上にも高まってくる。

早速、ニワトリのお出迎えだ。離れの玄関には柿の葉に小生の名前が書き込まれている。

オーナー田島さんは旅館を「地方文化の伝達手段」と言う。人はなぜ旅をする。「特に海外を旅すること、それは日常の違う文化に触れることに刺激や感動を求めているからではないのか」。でも、ここは鹿児島島の田舎で、ハワイやヨーロッパでもない。ではどうするか?高度成長期の日本は、建築物の新陳代謝がどんどん進む時代だった。古いものをできるだけ保存していこうという発想はほとんどない。

その頃、近隣の取り壊す予定の茅葺きの古民家を自分の宿へ運び小さな「村」を作った。日本人が忘れてきた田舎の郷愁を凝縮された空間に詰め込んでいったのである。この思想が黒川温泉に特に色濃く見える。由布院の宿には捻りがあって、ヨーロッパの田舎を匂わせたところが雅叙苑と一線を画すところである。

料理にも田島思想を十分に感じることができる。人はもともと周りで獲れる食材を食べてきた。だから自ら畑や鶏舎を持ち、地元の大地の味がする野菜、卵や鶏肉を生産する。日々使う野菜を自ら栽培し、旬の美味しい食材を提供することで疲れた身体を癒せるようにしている。お客へ馳走をする「畑のきゅうりをもぎ、茄子をちぎり、ニワトリを絞め、山女魚を捕って、炭をおこす。」そんな場面をイメージさせる宿である。

雅叙苑に似た温泉旅館が各地の温泉地に出始め、今度はだれもが簡単にまねできない新たな旅館建設に着手。1993年に始めた究極のリゾート「天空の森」は「人間性回復」がテーマだ。大自然の中に、裸の自分を置き、今までの自分は何なんだと考えるきっかけをくれる施設でもある。そういえばななつ星も「新たな人生にめぐり遭う、旅」がテーマになっている。

宿屋は面白い。「人生で一番大事なものは人との出会いだ。映画もよいが、映画では限られた関係者との出会いが主で、出会いの幅が狭い。宿屋では、毎日いろんなナマの人に出会える。だから宿屋のほうがいいよ」「ナマの人って?」「大臣や大企業の経営者に会おうとすれば、秘書を通したり、立場を考えたりしなければならぬ。しかし、宿屋では、皆、浴衣を着て『やあ、こんにちは』とお迎えができる。それがナマの出会いだ。宿屋の特徴であり、極意でもあろうよ」これは由布院亀の井別荘の中谷健太郎さんが東宝の映画の助監督を辞めて由布院に帰るよう諭すおじさんであり雪の結晶の研究者の中谷宇吉郎博士との一幕だ。(つづく)

